

異文化間ミス・コミュニケーションと デイスコース・ポライトネス理論

宇佐美まゆみ
東京外国語大学学院

はじめに

本稿では、対人コミュニケーションの理論としての「デイスコース・ポライトネス理論(DP理論)」(宇佐美2001, 2002, 2003, 2008a)を簡単に紹介するとともに、「異文化間ミス・コミュニケーションとポライトネス」にかかわる問題を, DP理論の観点から考察する。そのために, まず, 本稿で言う「ポライトネス」の定義を確認した上で, 「ポライトネスの普遍理論研究」と「ポライトネス・ストラテジーの比較文化語用論的研究」の区別を明確にする必要性を指摘する。その上で, 異文化間コミュニケーションにおいて, 第一言語におけるポライトネス・ストラテジーが, 第二言語に転移されることによって引き起こされる異文化間ミス・コミュニケーションの問題の解決に, DP理論がいかに貢献できるかを, 具体例をあげながら考える。

일본어학과 일본어교육

日本語学・日本語教育

⑤ 담화(談話)

宇佐美まゆみ(2013)「異文化間ミス・コミュニケーションとデイスコース・ポライトネス理論」
韓美卿編『日本語学・日本語教育 ⑤』、J&C: 291-304.14頁.2013年5月.

1.1 ポライトネスの普遍理論探究のための「ポライトネス」の操作的定義の必要性

ポライトネスの普遍理論を追究するためには、「ポライトネス」という用語を操作的に定義しておく必要がある。つまり、「ポライトネス」という言葉の「語源」や「意味論的意味」、「常識的意味」を問題とするのではなく、定義した内容に相当するものが、「ポライトネス」であると考えなければならぬ。本来は、操作的に定義された概念さえ理解していれば、用語自体は、「ポライトネス」でも「対人配慮行動」でもどちらでも構わない。用語の違いが理論の本質を妨げることはないのである。

B&L(1987)の「ポライトネス」の定義を最も簡潔に表すと、「円滑な人間関係の確立・維持のための言語行動」であると説明してきた(宇佐美 2001 等)。これを、より厳密に、操作的に定義すると、「『ポジティブ・フェイス』と『ネガティブ・フェイス』という人間の2つの基本的欲求を満たすような言語行動」であるということになる。人間には、対人コミュニケーションに関する2つの「基本的欲求」があるとする。他者に理解されたい、好かれたい、賞賛されたい、仲間に入れてほしいという「プラス方向への欲求」である「ポジティブ・フェイス(positive face)」と、他者に立ち入られたくない、邪魔されたくないという「マイナス方向に関わる欲求」である「ネガティブ・フェイス(negative face)」である。「ネガティブ」とは、「否定的な」という意味でも「消極的」という意味でもない。

この2種類のフェイスについては、B&L(1987)の中でも、パラフレーズする形で、いくつかの異なる説明がなされている。例えば、「ポジティブ・フェイス」は、「肯定的な自己イメージ」、「ネガティブ・フェイス」は、「行動の自由と束縛からの自由」などと説明されていたりする。しかし、そのような「フェイス」という用語のより概念的で一般的な表現や説明に「こだわってしまう」と、操作的に定義された要素で構成されているB&Lのポライトネス理論の本質を見失ってしまう。

「ポジティブ・フェイス」と「ネガティブ・フェイス」を、それぞれ、他者に「近づきたい」という欲求と「ある程度は距離をおきたい」という欲求」という「2種類の基本的欲求」として操作的に捉えることが、この理論の正確な理解に最も必要なことであり、日本語で表したほうがわかりやすい場合には、筆者は、「親近欲求、

「不可侵欲求」という用語を使うようにしている。B&Lは、この人間の「基本的欲求」としての2種類のフェイスを脅かさないように配慮するストラテジー群の「総称」を、「ポライトネス」であると捉えた。そして、それぞれ、ポジティブ・フェイスを配慮するストラテジーを「ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」、ネガティブ・フェイスを配慮するストラテジーを「ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー」と呼んだのである。

B&Lの言う「ポライトネス」とは、操作的定義に基づくと、「人間の2つの基本的欲求であるポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスを配慮する言語ストラテジー」ということになる。B&Lの言う「ポライトネス」とは、それ以上でも以下でもない。ディスコース・ポライトネス理論も、基本的にこのようなポライトネスの捉え方を踏襲した上で、新たに、話し手側のストラテジーとしてのポライトネスだけでなく、聞き手側から見た「効果」としての「ポライトネス効果」という概念を加え、この2つを分けて考える捉え方を提示した。

言語行動として表面に表れる具体的な「ポライトネス・ストラテジー」は、当然、各々の言語・文化によって異なる。しかし、円滑な人間関係としての「ポライトネス」への欲求・動機には、普遍性があるはずであると考えるのが、「ポライトネスの普遍理論」探究者の立場である。ディスコース・ポライトネス理論の目的は、そもそものが、各々の言語・文化によって異なる「ポライトネス・ストラテジー」を生み出すに至る、その「原則の普遍性」を扱うものであるということ、改めて強調しておきたい。そのような捉え方に、既に、ディスコース・ポライトネス理論が言語理論ではなく、「人間の社会的行動の理論」であることが反映されていると言えるだろう。

「異文化間コミュニケーションとポライトネス」について、文化による違いが論じられるのは、主に、話し手側がとる「ポライトネス・ストラテジー」のほうであるが、それを聞き手側がどう受け止めるかという点にも文化差がある。ディスコース・ポライトネス理論は、その差が生みだす効果についての原則も示したものである。つまり、ディスコース・ポライトネス理論は、文化によるポライトネス・ストラテジーの違いが引き起こす異文化間ミス・コミュニケーションにおける摩擦など、様々な問題の解決の糸口を導くヒントにもなるものである。

III デイスコース・ポライトネス理論(DP理論)の概要

本項では、ディスコース・ポライトネス理論(DP理論)の概要を簡単に紹介する。ディスコース・ポライトネス理論には、以下の7つの概念がある。①「ディスコース・ポライトネス」、②「基本状態」、③「有標ポライトネス」と「無標ポライトネス」、④「有標行動」と「無標行動」、⑤ポライトネス効果、⑥見知り差(De値)と行動の適切性、ポライトネス効果の関係、⑦「相対的ポライトネス」と「絶対的ポライトネス」。

以下、それぞれについて簡単に解説する。

1. 「ディスコース・ポライトネス(discourse politeness)」

「ディスコース・ポライトネス」とは、一文レベル、一発話行為レベルでは捉えることのできない、より長い談話レベルにおける要素、及び、文レベルの要素も含めた諸要素が、語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体である(宇佐美 2001, 2002, 2003)と定義される。また、特定の「活動の型」の「典型的な状態にある談話の総体」も指す。

2. 「基本状態(default)」

「基本状態」には、以下の2種類がある。1つは、「特定の「活動の型」における談話の「典型的な状態」を指し、「談話の基本状態」と呼ぶ。また、もう1つは、「その談話の基本状態を構成する要素としての『特定の言語行動や言語項目それぞれの典型的な状態』を指し、「談話要素の基本状態」と呼ぶ。前者は、理論的観点から想定するもので、談話内の諸要素を特定するものではない。後者の「談話要素の基本状態」とは、個々の研究において研究対象として設定した要素について、同定・算出するものである。例えば、数多くの同じ活動の型の「典型的な状態の談話」における「主要な言語行動の平均的な構成比率(分布)」、「各々の要素の平均的な生起率」、「典型的な談話展開パターン」などがある。

より具体的に言うと、「ある活動の型の談話における重要要素の構成比率の基本状態」とは、例えば、成人の初対面二語間会話では、スピーチレベルの構成比

率が、敬体1:スピーチレベルのマーカーなし3、であるのが基本状態であるというように捉え方を言う。「談話内の『特定の要素』の基本状態」とは、スピーチレベルという要素を例にとると、成人の初対面二語間会話においては「敬体使用率が約6割」であるのが基本状態であるというように捉え方であり、「談話の展開パターンの基本状態」とは、依頼会話において、注意喚起→見込みの確認→補助ストラテジー→依頼発話という展開になるのが基本状態であるというように捉え方である(宇佐美 2001)。

これらの「基本状態」を一般化するには、数多くのデータを分析・検証し、同定していく必要があるが、ディスコース・ポライトネス理論の枠組みで行う個々の実証研究においては、「基本状態」自体を一般化することが目的ではないので、当該データで同定した「基本状態」は作業仮説として扱う。そして、当該の言語行動の「基本状態からの離脱度」を「有標性」と呼び、その「ポライトネス効果」は、有標性の度合いについての話し手と聞き手の見知りの差によって、引き起こされるものであると捉える(詳細は、「⑤ポライトネス効果」を参照)。「基本状態」は、このような「相対的效果」を予測したり解釈するための前提として、同定しておく必要があるものとして捉えるのである。

ディスコース・ポライトネス理論の最も重要な点の一つは、上述のような「基本状態」を「媒介変数(parameter)」として扱うことによって、「ポライトネス効果を相対的に捉える」ということを、より具体化して理論に組み込んだ点である。

3. 「有標ポライトネス(marked politeness)」と「無標ポライトネス(unmarked politeness)」

Brown & Levinson(1987)のポライトネス理論におけるポライトネスは、基本的には、依頼行為などのように、相手のフェイスを脅かす「フェイス侵害行為」を行わざるを得ないときに、「相手のフェイス侵害度を少しでも軽減するためにどるストラテジー」として捉えられている。このような「フェイス侵害度の軽減行為」としてのポライトネスを、ディスコース・ポライトネス理論では、「有標ポライトネス」と呼ぶ。

しかし、このように、「相手のフェイス侵害度を軽減するためにどるストラテジー」としてのみポライトネスを捉えると、フェイス侵害行為(Face Threatening

Act: FTAが生じていない状態にある「日常会話(ordinary conversation)」などにおける「ポライトネス」をうまく説明できないことになる。そのため、我々の日常生活には、「フェイス侵害度軽減行為」とは異なるタイプのポライトネスもあると捉えることが必要になる。それは、「特定の状況や場面において期待されている言語行動」と関係する。特定の状況で、「あって当たり前で、それが現れないときに初めてそれがいないことが意識され、ポライトではないと捉えられる」という類のものである。このようなタイプのポライトネスをディスコース・ポライトネス理論では、「無標ポライトネス」と呼ぶ。先に説明した談話の「基本状態」は、「ポライトネス」の観点からは、「無標ポライトネス(相手のフェイスを侵害していない状態)」であると捉えることができる。

ディスコース・ポライトネス理論では、「ポライトネス」をこのような、フェイスの侵害が生じていない状態にある日常会話における「基本状態」としてのポライトネス(無標ポライトネス)も併せて、より体系的に捉えるものである。そのため、ポライトネスを「有標ポライトネス」と「無標ポライトネス」とに分けて考え、それぞれを体系的に理論に組み込んでいる。

4. 有標行動(marked behavior)と無標行動(unmarked behavior)

談話の「基本状態」は、ポライトネスの観点からは、「無標ポライトネス」である。そして、談話の「基本状態」を構成する要素としての言語行動を「無標行動」、各々の要素の基本状態から離脱する言語行動、或いは、基本状態とは異なる談話レベルから見ただけの連続行動を、「有標行動」と呼ぶ。

ディスコース・ポライトネス理論では、特定の談話の「基本状態」は、ポライトネス効果を相対的に捉えるために同定する必要がある前提であると捉える。つまり、各々の談話と、それを構成する諸要素の「基本状態」を基にして、そこからの有標行動の「動き」や「有標性(基本状態からの離脱度)」に着目して、「相対的ポライトネス」の体系化を試みたものである。

5. ポライトネス効果(politeness effect)

談話の基本状態を構成する諸要素は、無標行動、つまり、あって当たり前の

のとして、ディスコース・ポライトネスを形作っている。この「基本状態」は、各々の要素の状態としても、複数の要素の分布の状態(異なるスピーチレベルの構成比率等)としても、そして諸要素から構成される談話の総体(ディスコース・ポライトネス)としても、ポライトネスの観点からは、「最適の状態」、或いは、「最も自然な状態」としての「無標ポライトネス」であると捉えられる。それ故に、もし、談話の基本状態を構成する要素の何かが欠けた場合や、或いは、何かが多すぎる場合、それが意識され、ポライトでないと認知されたり、その他の何か特別の効果が生まれると想定するのである。

ディスコース・ポライトネス理論では、「ポライトネス効果」とは、「談話の基本状態や話し手の言語行動、選択されたストラテジーに対する話し手と聞き手の『見積り差(Discrepancy in estimations: De値)』によって引き起こされる聞き手側からの認知」を表す。話し手と聞き手の「見積り差」をより具体的に記すと、次の3つにまとめられる。①「ある有標行動のフェイス侵害度」についての話し手と聞き手の見積り差 ②「談話の基本状態」が何であるかについての話し手と聞き手の見積り差 ③「フェイス侵害度に応じて選択されたポライトネス・ストラテジー」についての話し手と聞き手の見積り差

いずれにしても、ポライトネス効果には、以下の3種類がある。すなわち、①プラス効果、②ニュートラル効果、③マイナス効果である。これらは、言い換えると、①心地よい、丁寧だと感じるという効果、②ニュートラルな効果(強調や話題転換などのように、特に丁寧と感じるわけでも不愉快でもない効果: 言語的談話効果等)、③不愉快な、失礼だと感じる効果である。

6. 「見積り差(Discrepancy in estimations: De値)」と「行動の適切性(appropriateness of behavior)」, 「ポライトネス効果(politeness effect)」の関係

上述した3種類の話し手と聞き手による「見積り差(De値)」は、もちろん、絶対的な数値として算出できるわけではないが、以下の図1に示すように、0を挟む-1から+1までの一つの連続線上に分布すると仮定することによって、体系的に捉えることができる。「見積り差(De値)」と「行動の適切性」, 「ポライトネス効果」の関係は、次の図1のようになる。

つまり、話し手と聞き手の「見損もり差」が、0か、「許容できるずれ幅(α)」の範囲内に収まる行動は、「行動の適切性」の観点からは、「適切行動」とみなされ不快感をもちたらない。つまり、ポライトネス効果の観点からは、プラス効果を生むか、ニュートラル効果になる。また、話し手の見損もりが聞き手の見損もりよりも、「許容できるずれ幅(α)」を超えて少ない場合、行動の適切性の観点からは、「過少行動」となり、ポライトネス効果の観点からは、マイナス効果(失礼、不快)を生む。逆に、話し手の見損もりが、聞き手の見損もりよりも、許容できるずれ幅(α)を超えて多い場合、それは、行動の適切性の観点からは、「過剰行動」となり、ポライトネス効果の観点からは、マイナス効果(見損無礼、失礼、不快)を生むことになる。

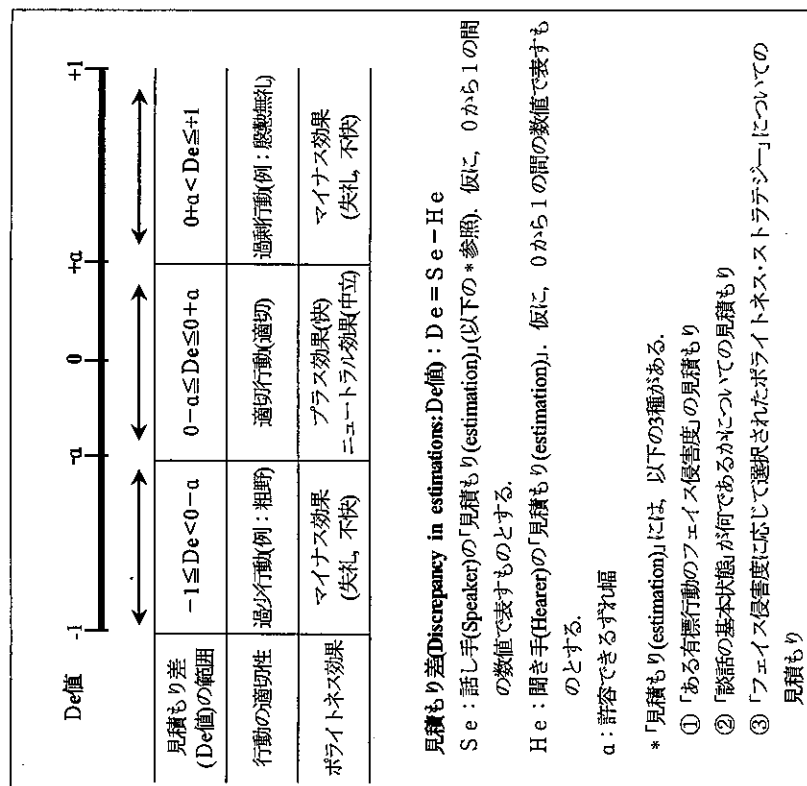


図 1 「見損もり差(De値)」、「行動の適切性」、「ポライトネス効果」

これまで、敬語研究などでは、あまり扱われてこなかった「見損無礼」は、デイスコース・ポライトネス理論で解釈すると、「話し手が、聞き手が当該の状況で適切であると考えた言語行動よりも、「許容できるずれ幅」を超えて、「丁寧な表現」を使用した」場合であると解釈できる。つまり、「話し手が、聞き手が期待する、当該の状況における図1に記した3種の「見損もり」に応じた言語表現よりも、「許容できるずれ幅」を超えて、「丁寧すぎる表現」を用いた場合(過剰行動)」であるということになる。

このように、実際の「ポライトネス効果」は、「談話の基本状態が何であるか」という見損もり、「特定の言語行動に対するフェイズ(侵害度)の見損もり」、及び「フェイズ(侵害度)に応じて選択されたポライトネス・ストラテジーの見損もり」の話し手と聞き手の「差(ずれ)」から生まれるという「相対的観点」を、より具体化して理論の体系に組み込んだという点も、Brown & Levinsonのポライトネス理論にはない。デイスコース・ポライトネス理論において初めて取り入れられた新しいポライトネスの捉え方である。このような観点は、「異文化接触場面」でしばしば生じる誤解に基づく問題を記述する際の一つの枠組とも成り得る。

7. 「相対的ポライトネス(relative politeness)」と「絶対的ポライトネス(absolute politeness)」

最後に、「相対的ポライトネス」と「絶対的ポライトネス」についてまとめる。言語形式について言うなら、「行く」より「いらつしやる」のほうが丁寧度が高いとか、その他の条件が一定ならば、直接的表現より間接的表現のほうが、より丁寧であるというような捉え方は、「絶対的ポライトネス」を扱っていると言える。しかし、現実には、いつも常体で話す相手(スピーチレベルの「基本状態」が常体)に「敬語」を使うと、かえって皮肉やいやみになるというように、たとえば、敬語を使っているとき、「マイナスイメージ」を生むこともある。つまり、常体が無標スピーチレベルである談話において「有標行動」となる敬語を使用することは、言語形式自体は、「敬語」であるにもかかわらず、相手に失礼だと感じさせたり、不愉快にさせたりするというような「マイナスイメージ」を生み得る。一方、仲間意識を高めるために用いる「ため口(友達同士の言葉遣い)」は、言語表現の丁寧度は低くても、プラス効果として機能することもある。

つまり、実質的に「ポライトネスの効果」を生み出すのは、「言語形式」それ自体の丁寧度ではなく、ある特定の「談話」の「基本状態」からの離脱や回帰という言語行動の「動き」である。そして、その「ポライトネス効果」は、特定の場面においてどのような言語行動が適当であると考えているかという「基本状態の認識」、「当該の言語行動や談話行動のフェイス侵襲度」、及び、「フェイス侵襲度」に応じて選ばれたポライトネス・ストラテジーの3つのうちのどれか、或いは、すべてにおける話し手と聞き手の「見積もり差(ずれ)」から生まれると考えるのである。これらが、「相対的ポライトネス」という捉え方である。上述したように、デイスコース・ポライトネス理論は、対人コミュニケーションにおけるポライトネスをより広い観点から捉えて体系化しようとするものであり、円滑な人間関係を確立・維持するための言語行動としてのポライトネスだけではなく、「失礼」「無礼」「怒態無礼」といった行動も、マイナス・ポライトネスとして、同一の枠組みで捉えるものである。

IV 「デイスコース・ポライトネス理論」の新視点

ポライトネス理論にかかわる最新の動向は、宇佐美(2008b)にまとめられているが、他のアプローチも概観した上でのデイスコース・ポライトネス理論の特徴としては、以下の6つの新しい視点がある。

(1) ポライトネスを、「言語行動におけるいくつかの要素がもたらす機能のダイナミクスの総体」として談話レベルから捉える。そして、そのように総体として捉えたポライトネスを「デイスコース・ポライトネス」と呼んで、「文/発話レベル」のみから見たポライトネスと区別する。

(2) 「基本状態」という概念を導入し、(1)で説明した総体としての「デイスコース・ポライトネス」を、当該談話の「基本状態」という「媒介変数(parameter)」として捉える。それとともに、同じ活動の型における数多くの「失礼のない状態の談話」において、デイスコース・ポライトネスを構成する要素の「当該談話における平均的な構成比率」や、「各々の要素の平均的な生起率」、「典型的な談話展開パターン」などを、「それぞれの言語行動や談話展開パターンの基本状態」として捉える。

(3) デイスコース・ポライトネス理論では、話し手が見積もる「ポライトネス・ストラテジー」と、話し手が実際に行った言語行動のフェイス侵襲度についての話し手と聞き手の「見積もり差(De値)」によって引き起こされる「聞き手側から見た認知」としての「ポライトネス効果」を区別して考える。

(4) 「ポライトネス効果」は、次の3種の「話し手と聞き手の見積もり差」のいずれか、或いは、すべてによって、相対的に生まれてくると考える。①話し手が実際に行った言語行動のフェイス侵襲度についての見積もり差、②「談話の基本状態」が何であるかについての見積もり差、③「フェイス侵襲度の見積もり」に応じて選択されたストラテジーについての見積もり差

(5) 話し手と聞き手の種々の見積もりのずれが、「許容できるずれ幅(0±d)」内に収まる場合、ある特定の有標行動(一発話レベル・談話レベル)の「ポライトネス効果」は、当該の談話やそれを構成する要素それぞれの「基本状態」を基にして、そこからの有標行動の離脱の度合い(有標性)に応じて相対的に生まれてくるものであると捉える。

(6) デイスコース・ポライトネス理論は、この「相対的效果」という捉え方を理論の核とする。

IV 「デイスコース・ポライトネス理論」の枠組みから見た第二言語における円滑なコミュニケーション方法の「学習」

第二言語における会話においては、情報を伝達するだけではなく、コミュニケーションを円滑に行えるようになることも必要である。ここで、改めて、デイスコース・ポライトネス理論の枠組みで第二言語における「学習」を解釈する。デイスコース・ポライトネス理論の観点から考えると、第二言語における円滑なコミュニケーションの方法を身につけるということは、目標言語における様々な活動の型における「談話の基本状態」や「談話を構成する諸要素の基本状態」を適切に見積もることができるようになるということである。換言すれば、学習者と目標言語・文化の平均的な成員との種々の談話の「基本状態」の捉え方がほぼ一致しており、且つ、ある言語行動の両者の「フェイス侵襲度の見積もり差(De値)」が「0」をはさんだ許容

できるずれ幅(0±α)の範囲内に収められるということである。つまり、フェイス侵害度の見積もり差(De値)が0か許容範囲内であれば、マイナス効果は生まれず、よって「コミュニケーションが円滑に行われている」ということになる。

例えば、聞き手としての母語話者が、ある場面における「フェイス侵害度」から考えると、「そうだったんですか」と「敬体」を使うのが適切であると見積もっているときに、話し手(学習者)が「そうなの」と常体を使い、それが聞き手の期待(見積もり)より低すぎた場合、見積もり差(De値)が0-αの許容範囲よりも低くなり、したがって相手に「失礼だ」(マイナス効果)と感じさせることになる。逆に進めると、学習者は、当該談話の基本状態を学習や経験を通して把握し、それにあわせた言語行動を行ったり、フェイス侵害度を基本状態、選択すべきストラテジーの見積もり差であるDe値を、「0±α」の許容範囲内に収めることができれば、その言語における適切な言語運用を学習し、実践できると考えることができるのである(宇佐美, 2008a)。

Ⅶ 異文化間コミュニケーションとディスコース・ポライネス理論

最後に、異文化間コミュニケーションを、ディスコース・ポライネス理論でどのように解釈していくかという例をあげておく。ここでは、先行研究から、一例をあげておく。

鄭榮美(2005)は、日韓両文化における誘い会話の談話展開パターンについて研究した結果、日本語では、一旦成立したはずの誘い内容について何度も確認するという傾向が韓国語よりも多く観察されたと報告している。その相違についてDP理論の観点から考察し、以下のようまとめている。すなわち、韓国語母語話者の「基本状態」は、一旦成立した誘い内容については、改めて何度も確認しないというものである。一旦成立したはずの誘い内容について何度も確認するという日本語のパターンは、「有標行動」となる。そして、その効果としては、「不可解」、「くどい」というマイナス・ポライネスを引き起こす恐れがある。一方、日本語母語話者にとっては、一旦成立した誘い内容の確認がないという韓国語のパターンは、有標行動となり、その効果としては、本心に誘いが成立しているか

どうか「不安」になるということなどが考えられ、こちらもマイナス・ポライネスになる恐れがあるとする。このような一種のミス・コミュニケーションは、「一緒に、〇〇しませんか?」というような誘い発話という一発話レベルにおける言語形式の丁寧度が十分適切であった場合にも起こり得ることである。そのため、談話レベルからの分析と考察が必須なのである。鄭榮美は、これらの基本状態の違いは、配慮というものに対する価値観の違いから生じるものであると考察した。つまり、日本語では、自分の意向を明確には述べず、相手と合わせようとすることによって、相手への配慮を示す傾向があるため、相手の本意を確認する必要がある。それに対して、韓国語では、お互いに、自分の意向は明確に述べるが、意見が対立するときは、ポライトネス・ストラテジーを用いてフェイス侵害度を和らげることによって、相手への配慮を示していると解釈する。つまり、日本語と韓国語では、「相手への配慮の仕方が異なる」と解釈できるのである。これらは、「母語話者には意識できないコミュニケーション・スタイル」(宇佐美, 2012)の一つであるとも言える。

この研究例では、ディスコース・ポライネス理論の「基本状態」という概念を元に、なぜ日韓それぞれ談話行動の「基本状態」が異なるのかまで分析した結果、「配慮に対する価値観が異なることが、談話行動の基本状態の違いに反映されている」と説明することにつながった。現実的には、お互いの「基本状態の違い」についての理解がなければ、個々の発話の意味・機能が理解しやすくなり、異文化間ミス・コミュニケーションを未然に防いだり、減少させることにもつながれる。ひいては、より円滑な異文化間コミュニケーションの確立にも役立てることができるだろう。

このように、「誘いの談話行動」というような特定の談話の無標ポライネスとしての基本状態は、各々の言語文化によって異なるということを十分考慮に入れた上で、母語話者と非母語話者の相互作用を分析していくことによって、単に敬語の使い方が間違っているというような文レベルの現象を超えてある。「談話のポライトネス」の異文化間ミス・コミュニケーションの原因解明につなげていくことができる。さらには、このような基本状態の違いを考慮した解釈や対応は、「言語教育」にも応用できる観点が多々ある(宇佐美, 2009)。今後、日韓対照語用論的研究において、ディスコース・ポライネス理論の枠組を用いた研究や解釈が、さらに展開していくことを期待したい。

参考文献

- Brown, P. and Levinson, S. C. (1987) Politeness: Some universals in language usage. Cambridge: Cambridge University Press
- 鄭榮美 (2005) 「自然会話における「誘い」の日韓対照研究」, 東京外国語大学大学院地域文化研究科修士論文
- 宇佐美まゆみ(2001) 「談話のポライトネス-ポライトネスの談話理論構想-」 「談話のポライトネス」, 第7回国際シンポジウム報告書, 国立国語研究所, 凡人社, pp.9-58
- (2002) 連載「ポライトネス理論の展開 (1-12)」 「月刊言語」31(1-5, 7-13), 大修館書店, 毎月6頁(総頁数72頁)
- (2003) 「異文化接触とポライトネス-デイスコース・ポライトネス理論の観点から-」 「国語学」, 54(3), pp.117-132
- (2008a) 「相互作用と学習-デイスコース・ポライトネス理論の観点から-」 「西原鈴子・西原仁朗編『講座社会言語科学 第4巻 教育・学習』, ひつじ書房, pp.150-181.
- (2008b) 「ポライトネス理論研究のフロンティア-ポライトネス理論研究の課題とデイスコース・ポライトネス理論」 「社会言語科学」11(1)(特集「敬語研究のフロンティア」), 社会言語学会, pp.4-22
- (2009) 「伝達意図の達成度」 「ポライトネスの適切性」 「言語行動の洗練度」 から捉えるオーラル・プロファイゼンシー」 鎌田修・山内博之・堤良一編「プロファイゼンシーと日本語教育」, ひつじ書房, pp.33-67
- (2012) 「母語話者には意識できない日本語コミュニケーション」 野田尚史編「日本語教育のためのコミュニケーション研究」, くろしお出版, pp.63-82

付記: 本稿は, 「異文化間コミュニケーションとデイスコース・ポライトネス理論」 「韓国日本語文化学会国際学術発表大会論文集」を改訂したものである。また, 「デイスコース・ポライトネス理論」の骨格については, 内容柄, 以下にあげた筆者の論文と重なるところがあることをお断りしておく。

結果の背景にあるもの

-日韓若者調査の再分析-

はじめに

筆者は国立国語研究所の尾崎喜光(当時)を代表とするチームの一員として, 領域意識に関する日韓若者調査(2003年)に参加した。この調査は言葉の有無に関する意識や相手との空間的な距離の取り方など, 自分と相手との領域意識が現れるような状況をいくつか取り上げ, 主として日韓の若者(20歳代)を対象にアンケート調査と面接調査を行ったものである。この調査の結果と分析は, すでに尾崎編(2008)にまとめられ刊行されている。しかし, 尾崎編(2008)ではアンケートの設定ごとの詳しい分析が行われているのみで, 設問間の関連性については全く分析されていない。筆者自身, 尾崎編(2008)において, ある一つの設問の結果分析を行った(生越2008)が, その分析で明らかになった日韓の違いが他の設問での日韓の違いと同じ性質のものなのか, この調査の結果は単に領域意識という概念だけで説明できるものなのか, などという点については十分解明できなかつた。尾崎編(2008)にはそのような未解明な点の分析など, 新たな角度からの研究を期待し

1 本稿は, 2010年11月に韓国中央大学で行われた中央大学国際学術シンポジウム「네오 제네시스」의 오늘(中央大学韓国文化研究院など主催)で発表された内容を一部修正したものである。